2025年1月5日　説教「あすのための心配は無用」

マタイの福音書6章25～34節

新年の礼拝。今年の当教会の御言葉を学んでいきます。イエス・キリストの山上の説教の一部分です。馴染み深い箇所ですが、今年の御言葉がどのような文脈のなかで語られたかを確認していきたいと思います。

１．いのちとからだ（25～26節）

①食べる、飲む、着る（25）**「だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりも大切なものではありませんか。」**

ここに「いのち」（プシュケー）という言葉と「からだ」（ソーマ）という言葉が出てきます。「いのち」は「永遠の命」（ゾーウェー）に対する言葉でありますが、私たちの地上の命のことです。「からだ」は肉体のことです。ここでは、その双方が神から与えられたものとして肯定的に語られています。何を食べ、何を飲み、何を着るかと心配する人に対して、「いのち」と「からだ」がより大切なのだと教えられます。

②空の鳥を見よ（26）**「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。」**

心配があって、うつむきがちな人に対して、イエスは顔を上に向けさせ「空の鳥を見なさい」と言われます。空を飛ぶ鳥は種蒔きも、刈り入れも、倉納めもしないという視点が提示されます。そして、天の父がそんな彼らを養って下さっているという恵みが語られます。また、人が鳥よりも優れた存在であることを示しながら、思い煩う者への導きを与えられるのです。

２．神が備える装い（27～30節）

①心配といのち（27）**「あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。」**

ここで使われている「いのち」（エーリキアン）は新共同訳のように「寿命」とした方がわかりやすいでしょう。神から与えられた地上の寿命は、私たちが心配してわずかでも延ばせるものではないと教えられます。

②野のゆりの育つ理由は（28）**「なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。」**

着る物のことで心配する向きに、イエスは野のゆりに目を留めさせます。彼らはどのように育っているのかと問いかけ、彼らは働きも紡ぎもしていないと指摘されます。つまり、彼らは自分で何か工夫してその外側の模様を作っているわけではなく、自ら糸や針を使って編んだり、加工したり、織ったりもしていないのです。

③ソロモンでさえ（29～30）**「しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾っていませんでした。きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、まして、あなたがたに、よくしてくださらないわけがありましょうか。信仰の薄い人たち。」**

そして、主イエスは観点を歴史へと移し、聞く者たちがよく知る知恵と富の王ソロモンの事を考えさせます。ソロモン王はどのような服を着ていたのでしょう。当時最高の布地を用い、優れた仕立て人によって作られた物だったでしょう。ところが、その王服と野のゆりを比較すれば、野のゆりのほうが勝っているではないか。明日にも炉に入れられてしまう野の草をさえ、それほどに装ってくださる神が、聞く者の着る物にも配慮してくださらない筈がありましょうかと問われるのです。ここで主は人々に「信仰」を促されます。

３．心配から信仰へ（31～34 節）

①必要を知る天の父（（31～32）**そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものは、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要あることを知っておられます。」**

25 節で述べられたことを繰り返されたイエスは、食べる、飲む、着ることの心配は、神を知らない異邦人たちが始終していることなので、神を知っている者たちにはものの見方を変えることを示されます。つまり、天の父なる神は、あなたがたのすべての必要をよく知っておられるのだから、心配ばかりすることは不信仰である、と教えられているのです。

②神の国とその義を第一に（33）**「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」**

「神の国を第一に求めよ」というのは、神がすべてをご支配されていることを優先して考えよというのです。「神の義を求めよ」とは、変わることのない公平な神の義を求めていきなさいということです。「求めよ」は求め続けなさいという意味でもあることは、新改訳聖書の脚注にもある通りです。これらを優先する時に、必要は備えられていくのだと主は教えられます。

③労苦はその日その日にある（34）**「だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」**

神があなたがたのことを考えてくださるのだから、明日のための心配は無用ですよと。ここに主イエスが私たちへの喜ばしく生きる秘訣を教えてくださいます。つまり、明日のことを心配するのではなく、今日という一日を生きることです。今日一日だけでも労苦はあるのです。明日の労苦のことまで、考えるのではなく今日を精一杯生きるという道です。

《結論》

ある方が言いました。「私は何も心配しません」。「それはありがたいことですね」と答えました。実際、思い煩うことなく生きることができることは喜ばしいことです。しかし、イエス・キリストが語ろうとしている重要な点は、その根っこにありました。それは、神の恵みです。神の恵みあればこそ、必要なものはすべて備えられるという大原則が忘れられていれば、心配はしなくとも肝腎なところをおろそかにするようなものです。また、野のゆりにソロモンの王服よりすばらしい、色合いやかたちを与えてくださっている方を忘れているならば、枯れるという末路を見るだけです。空の鳥の元気さも野のゆりの麗しさも、見守っていて下さる方が手を差し伸べてくださっているからです。

それにしても、25 節から数えてみると、「心配」（メリムナオー、新共同訳は「思い煩う」）という言葉はここも含めて 7 回も出てきました。それほどに、人は心配しやすいということでしょう。30 節では「信仰の薄い人たち」と主が言われていることからすると、信仰を持つ者も心配しやすいのです。いつの間にか心配のスパイラルのなかに入ってしまう私たちです。食べること、飲むこと、着ることの心配というのは、生活の基本の部分ではありますが、実を言えばその人の仕事、学び、家族、人間関係など、すべての領域に関わっています。また、将来についての心配は怪物のようにのしかかってくることもあります。パウロの書簡のなかにもあります。「何も思い煩ってはならない。」（ピリピ4:6）と。ピリピ教会のクリスチャンのなかに心配する人々の姿をみたからでしょう。

キリストの根本的な解決の道は、33 節にあるように、神の国とその義とを第一に求めるということでした。そうすれば、必要なすべては添えて与えられるのというのです。主を信じる者たちは、まずはここに立ちましょう。

ここで興味深いことは、主イエスは大原則ともいえる結論を述べられた上で、あえて私たちの心配について、ご配慮くだったお言葉を加えてくださっていることです。「だから、明日のための心配は無用です」「明日は明日が心配しますよ。」「労苦はその日その日に、十分あります」と、重ね重ねに慰めと励ましを与えてくださっているのです。

あなたは何かを心配をしていますか。実際のところ、正当な心配というのもあります。それを主は、その日に負うべき労苦と言い換えてくださっています。しかし、余計な荷物まで背負ってはいませんか。明日負うべき労苦を今はおろして良いのです。そして、今日なすべきことをなしていきましょう。

それにしても、心配というのはしつこいです。恵みの神にゆだねたそばから、新たなる心配を呼び込んでしまうのが私たちです。だからこそ、「神の国とその義とを、第一に求めなさい。」というお言葉が大切なのです。ここで「求める」（ゼーテイオー）は「求め続ける」であると学びました。心配が侵入してくるのを防ぐためにも、神にその思いを支配して頂くよう、求め続けていきましょう。

かく言う私自身が以前に比べれば、大分緩和していますが、思い煩いやすい者であることを告白します。ともに、神を求め続けていこうではありませんか。